

伊那谷で発生した水害・土砂災害の足跡マップ

－ 三六災害の記憶。そして、昔のことではない水害・土砂災害－

上伊那地域で発生した災害

－ 天竜川の堤防が決壊し、濁流があふれた －

三六災害時、三峰川上流や新宮川では各地で土石流が発生し甚大な被害が生じていましたが、三峰川下流では美和ダムにより土砂流出が抑えられたため、三峰川下流から天竜川の太田切川合流点付近までは部分的な堤防の破壊や浸水程度の被害で収まりました。また、平成18年の豪雨災害時は、上伊那地域での被害が顕著であり、下伊那地域で被害の大きかった三六災害時と対照的でした。



① 三六災害 三峰川上流



孤立沢や熊堂沢で土石流が発生し、戸草や市野瀬の集落に大きな被害がもたらされました。市野瀬では、県道を濁流が流れ、家屋半壊1戸、床下浸水5戸などの被害が生じたほか、伊那里小学校の校庭には、1m余りの土砂が堆積しました。戸草では、河川の氾濫で家屋全4戸や森林鉄道が流失しました。

② 三六災害 新宮川



上流で崖崩れが約390か所で発生し、土砂が新宮川に一気に流れ込みました。そのため、死者5名、被災人員558名に及ぶ人的被害となり、家屋や発電所の倒壊、橋の流出など建物にも被害が生じました。

③ 平成18年災害 沢底川

平成18年災害では、天竜川支川の沢底川で土石流が発生した。

④ 平成18年災害 松島北島

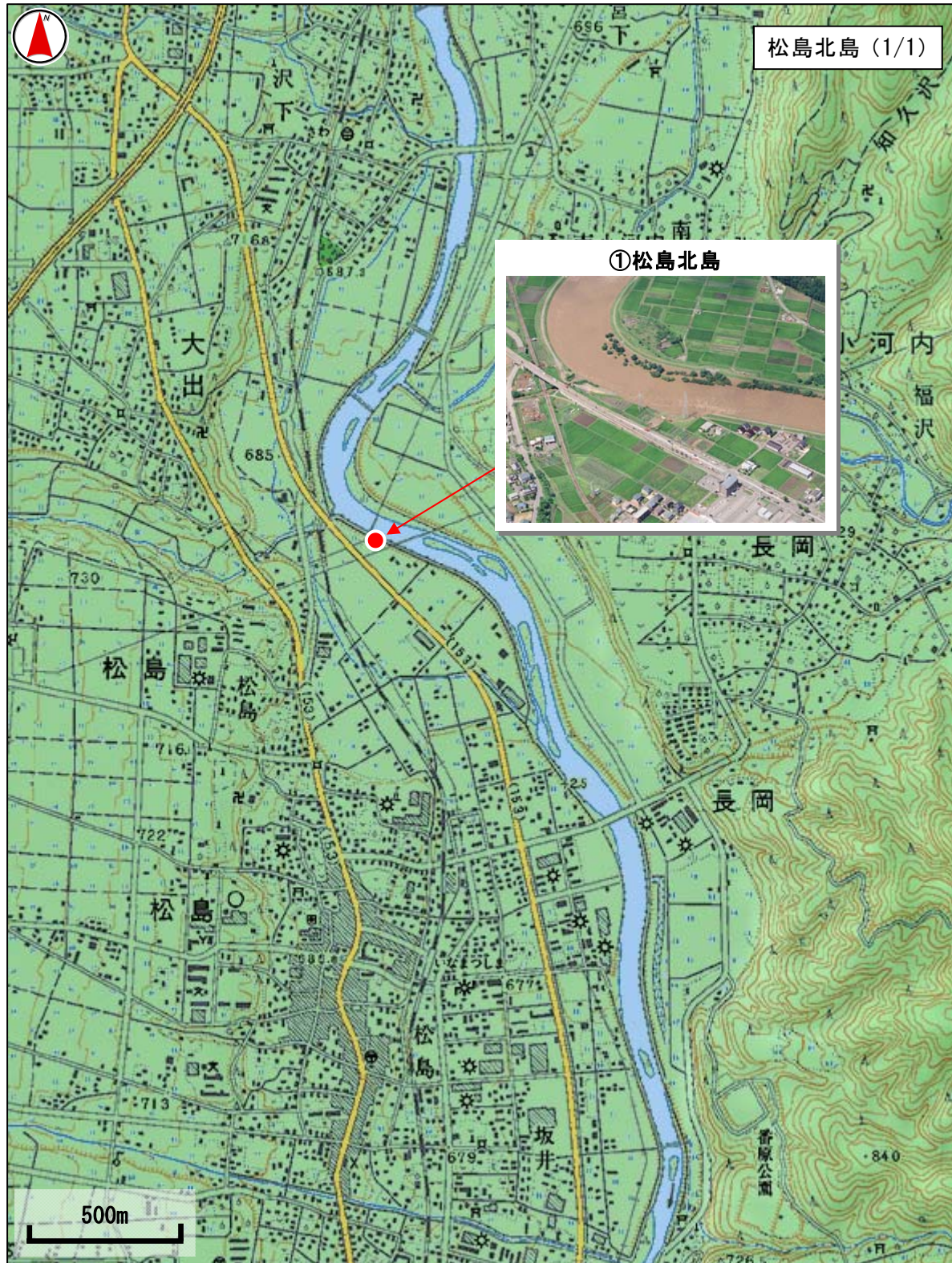
各地の水位観測所で警戒水位を超え、箕輪町松島北島地区では堤防100mにわたって決壊しました。

⑤ 三六災害 三峰川下流

美和ダム下流の一部で堤防が決壊しました。

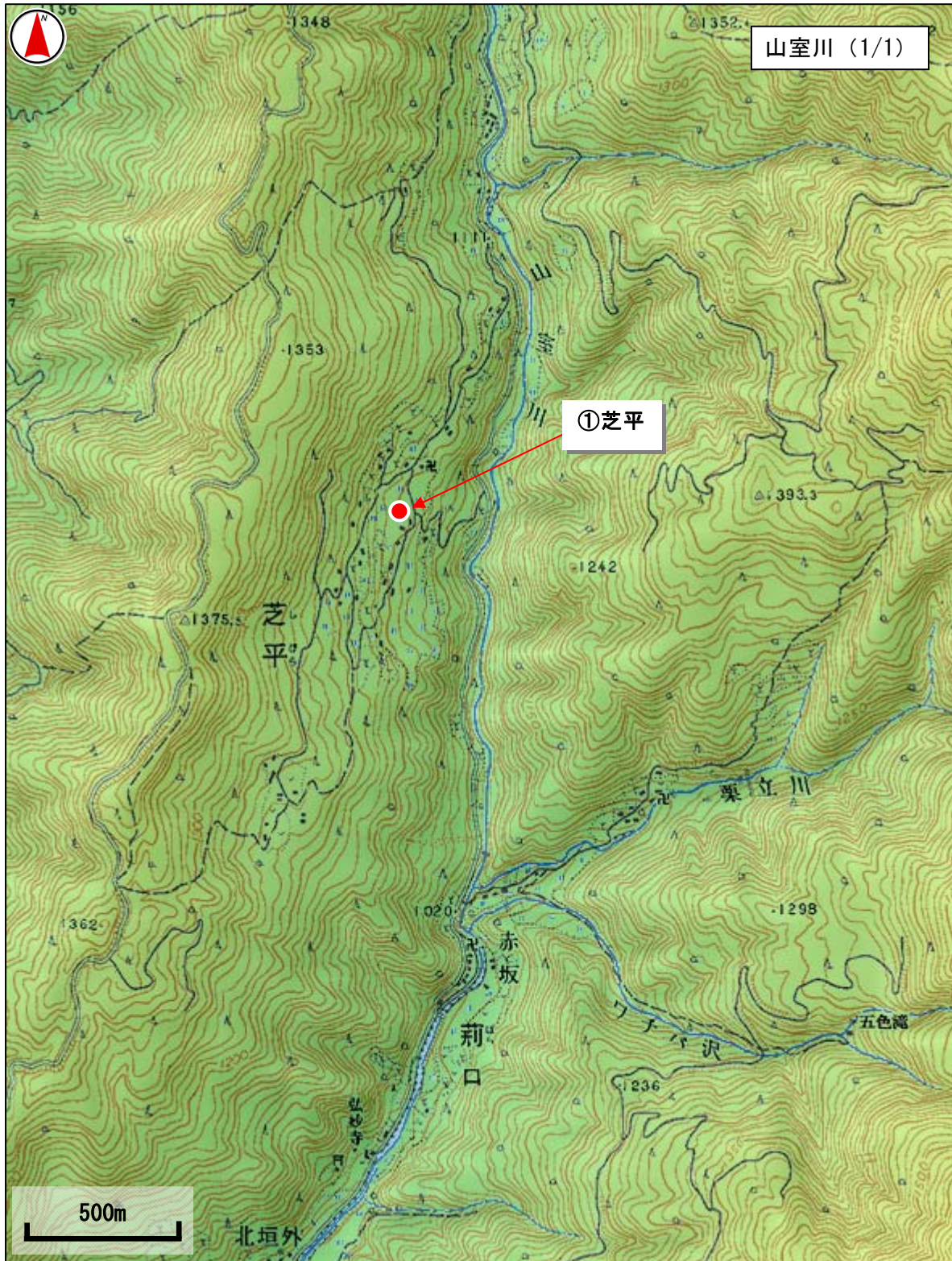
⑥ 三六災害 平成18年災害 太田切川

斜面が崩れやすく、特に平成18年災害では道路の通行や発電所に被害が生じました。



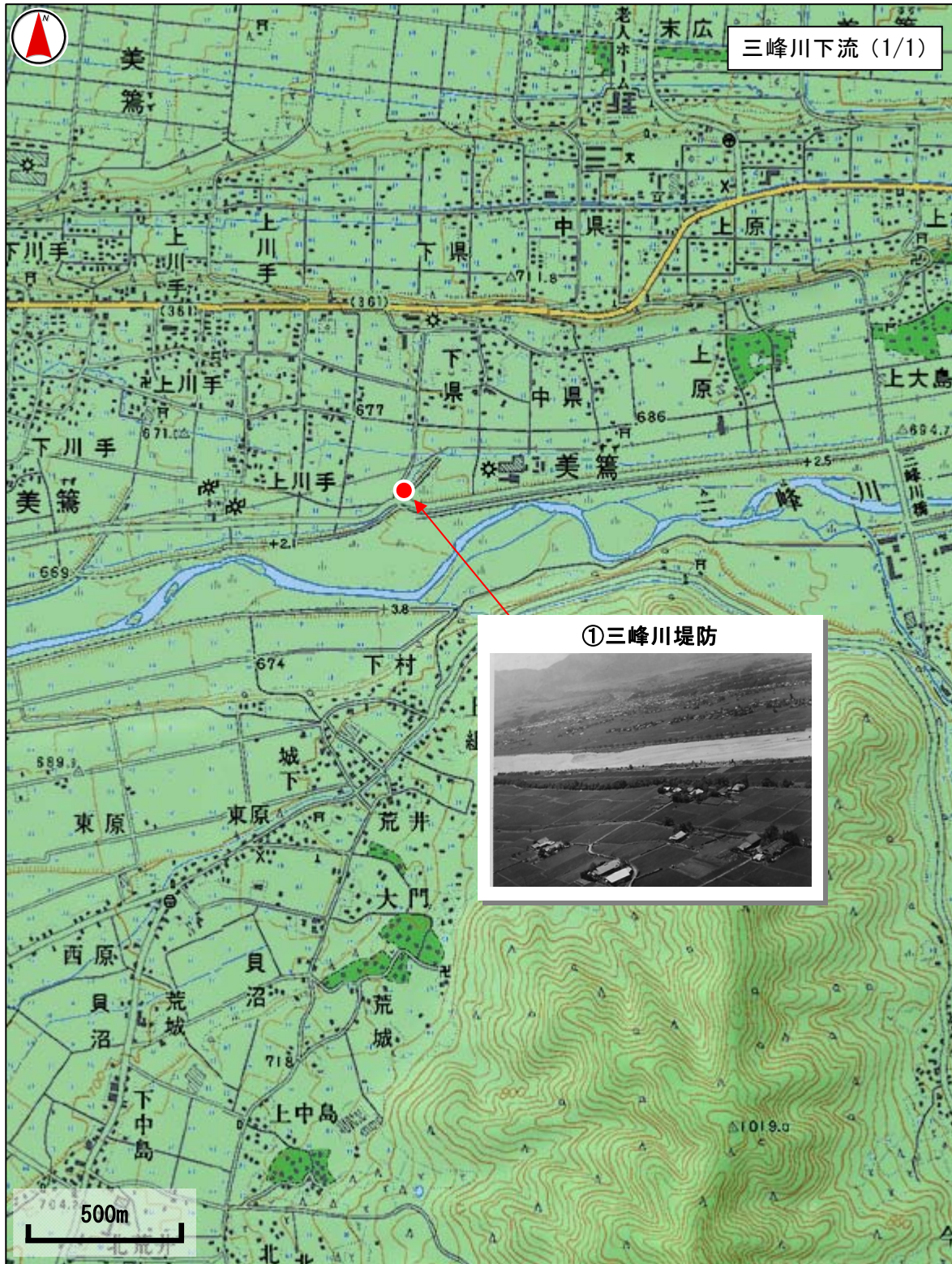
①松島北島

- ・ 平成 18 年 7 月の豪雨により増水した天竜川では、箕輪町の松島北島地区の堤防が 100m 以上にわたって決壊した。堤防越水はしなかったが、護岸が洗掘され決壊したと考えられている。
- ・ 緊急的に大型ブロック投入等の工事を行い、その後護岸工事を実施し復旧した。



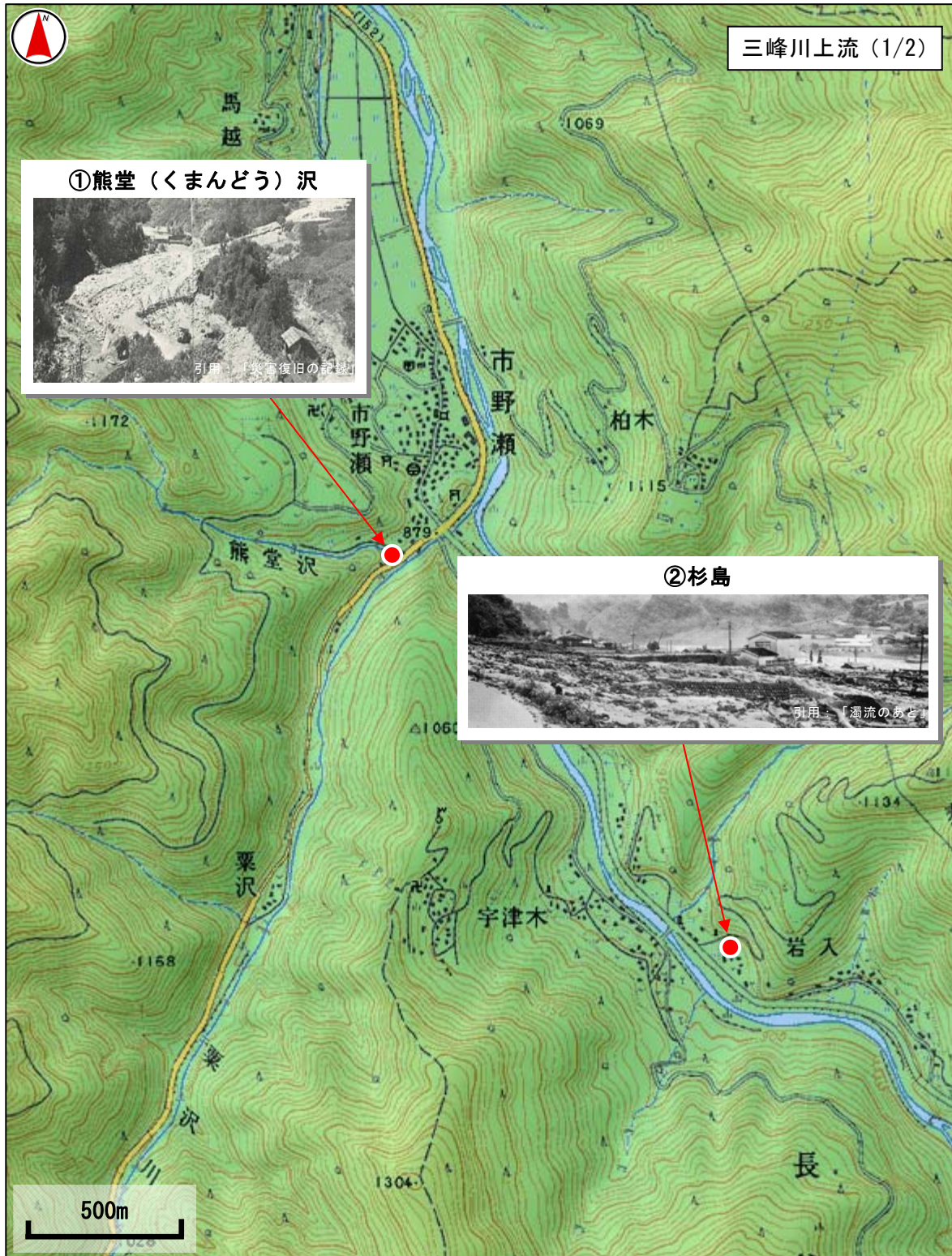
①芝平

- ・ 地すべりが顕著となり、河川の氾濫や土砂崩れもいたるところで発生した。道路も流れ、土砂は家の中に流れ込み、子供が亡くなるなどの被害も出た。被災地の復旧に努めたが、完全には元の生活に戻れなかったり、社会情勢の変化等により、数年後に集団移住することとなった。



①三峰川堤防

- ・ 三峰川の右岸側の堤防が決壊し、7ha 余りの水田が消失または浸水した。

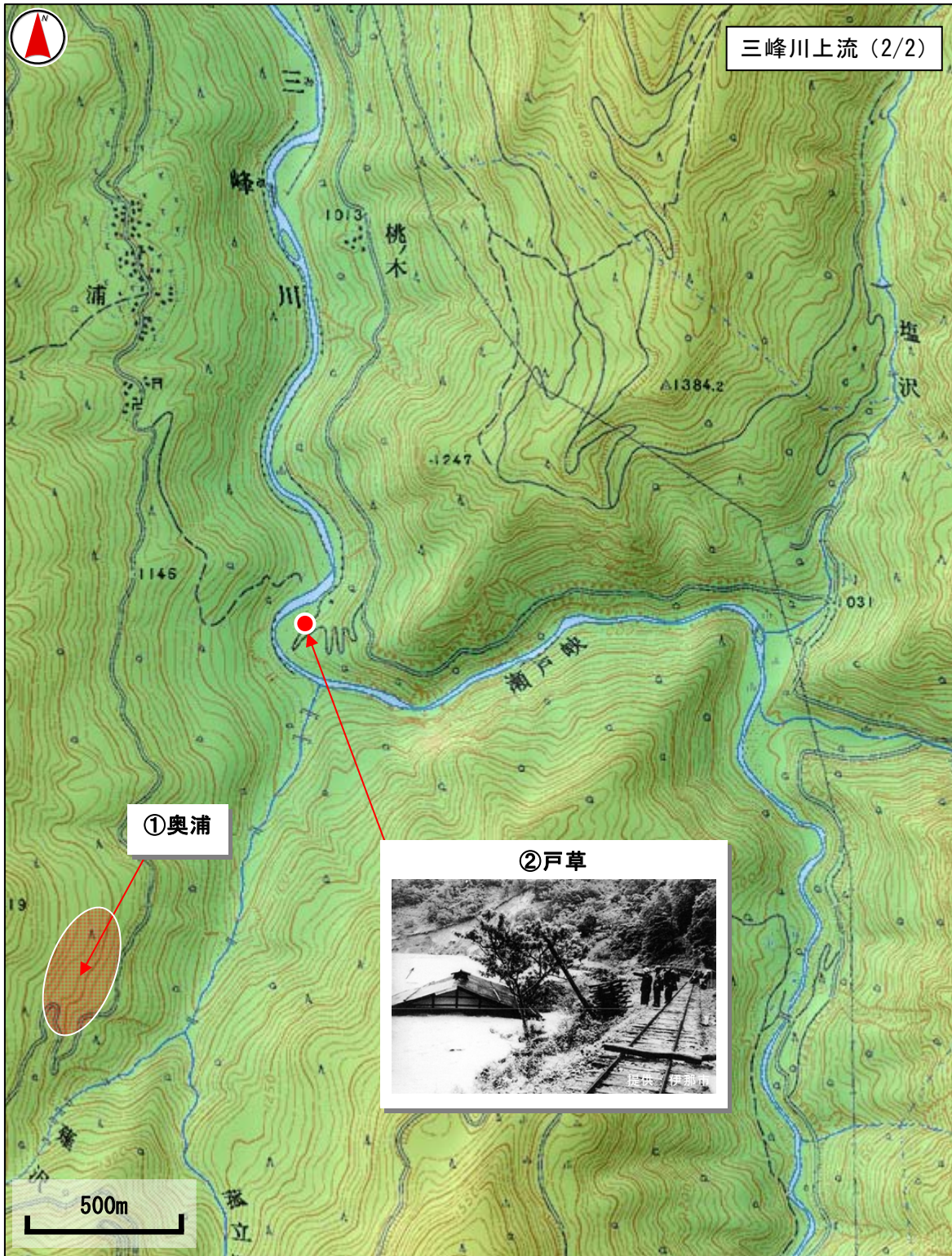


①熊堂（くまどう）沢

- ・ 熊堂沢から大量の土砂が押し出され、流路を変えて市野瀬集落に流入した。県道を濁流が流れ、家屋や小学校なども被害を受けた。

②杉島

- ・ 三峰川沿いの沖積地にある杉島地区では、川が氾らんし、水田や家屋が土砂で埋まった。



①奥浦

- ・ 集落すぐ下の土地が地すべりを起こしたため、やむなく集団移住をおこなった。国有林からの木材生産を主に行っていた約 24 戸は、約 300 年続いた歴史の幕を閉じ、集団移転を行った。

②戸草

- ・ 孤立沢や三峰川の氾らんで家屋全 4 戸や森林鉄道が流失し、集団移住を余儀なくされた。



①黒川

- ・平成18年7月の豪雨により、太田切川支川の黒川で斜面崩壊が発生した。崩れ落ちた土砂や立木は発電所を埋没させ、電力供給に被害を与えた。
- ・中央アルプス駒ヶ岳へと通ずる山岳道路は陥没や冠水などの被害を受け、最盛期の観光客や登山客の利用に影響した。



①新宮川岸

- ・ 川底の土砂を巻き込み成長した土石流は、新宮川を一気に下り立木を押し流し、新宮川橋を流失させた。
- ・ ここだけで24軒の家屋が土石流と濁流に巻き込まれた。



①新宮川発電所

- ・ 大正 8 年に中川村（現 駒ヶ根市中沢）の村営電気事業として発電が開始されたが、三六災害により発電所が流失した。被害が大きかったため再開の目処が立たず、そのまま廃止となった。
- ・ 山中には水圧鉄管や導水路がそのまま残されており、現在でも導水路は上水道用水路として使用されている。

②落合

- ・ 新宮川沿いの落合集落では流失家屋 16 軒に及び、稚蚕飼育所や路線バスの流失も見られた。

飯伊地域で発生した災害

— 三六災害で広範囲に甚大な被害を被った —

飯伊地域では、三六災害で天竜川沿いは一帯が水没するなど、大きな被害を受けました。また、崩れやすい地質（風化したカコウ岩）が多いため、天竜川支流でも土砂崩れ、土石流が各地で発生しました。そのため、山麓部から天竜川沿いの低地に至るまで、土石流によって埋まってしまい、被害はより大きくなりました。

No	災害発生時期	地域名
①	三六災害	日曾利
②	三六災害	四徳
③	三六災害	鹿塩川
④	三六災害	生田
⑤	三六災害	大西山
⑥	三六災害	大島川・田沢川
⑦	三六災害	野底川・飯田松川
⑧	三六災害	王竜寺川・伊賀良
⑨	三六災害	松尾・下久堅
⑩	三六災害	川路
⑪	三六災害 昭和43年災害 昭和58年災害 平成3年災害	本谷川など（天竜川流域）
⑫	平成12年災害	上村川・小川川（矢作川上流）
⑬	三六災害 昭和40年災害	遠山川
⑭	平成22年災害	遠山川・上村川



土石流の直撃を受けた家屋の惨状
(王竜寺川)



通りを流れ下る濁流
(王竜寺川)



7名の命が奪われた野底橋付近の惨状（野底川）



② 三六災害 四徳



各所で土砂崩れが発生し、土石流が繰り返し集落を襲いました。その結果、7名が死亡、61戸が被災した。災害前は84戸434名が生活していましたが、集団移住を余儀なくされました。

⑤ 三六災害 大西山



堅いが割れ目が発達しやすい岩石からなり、雨水の浸透によって不安定になった斜面は、幅500m、高さ450m、厚さ15mにわたって大きく崩れました。風圧と押し寄せる土砂によって、39戸が全半壊し、42名の命が奪われました。

⑥ 三六災害 大島川・田沢川



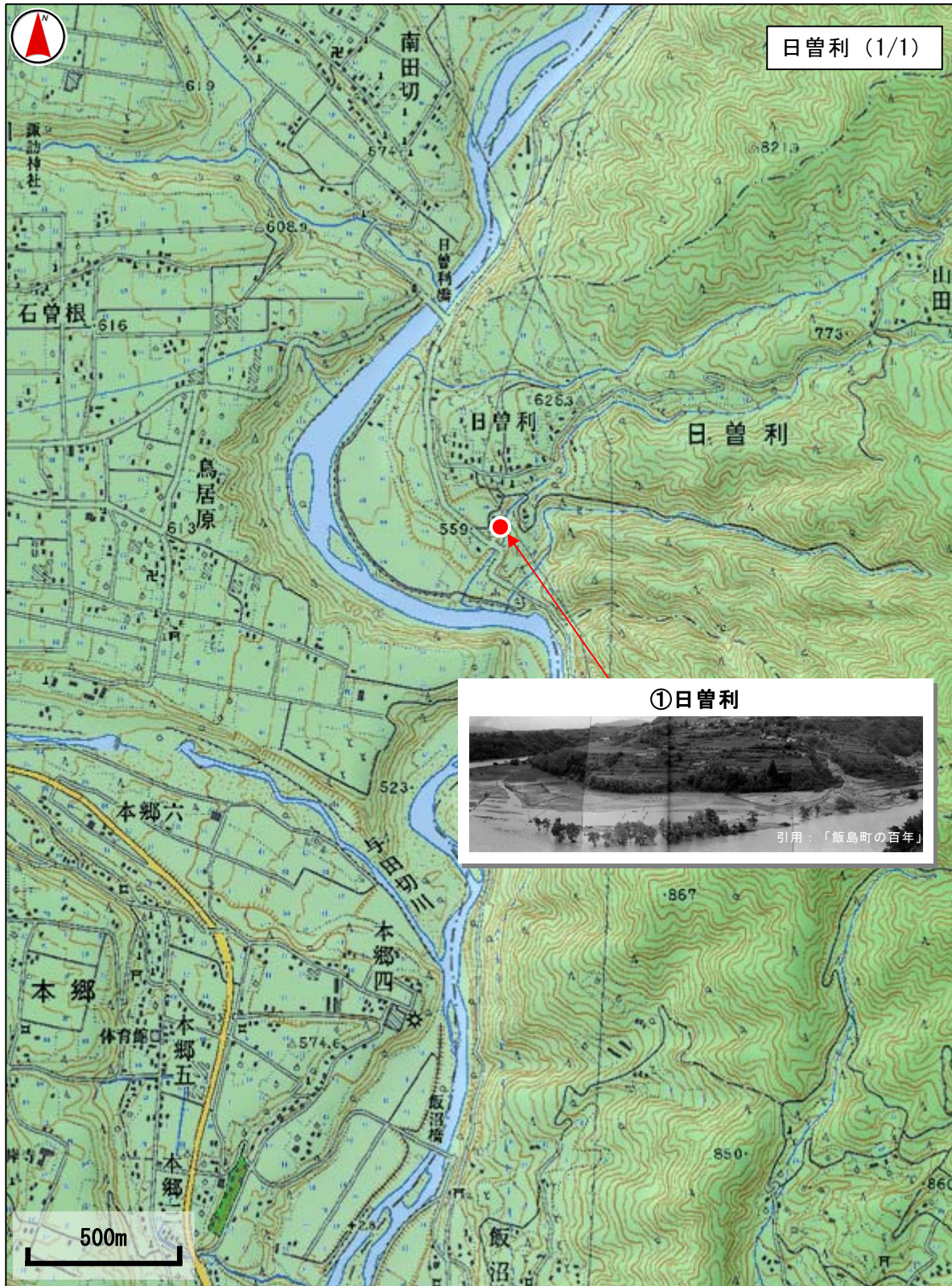
大島川では土石流が発生し、市田駅や天竜社の工場などが土砂で埋まり、11名の犠牲者を出しました。200年以上切れなかった惣兵衛堤防もこの時に決壊しました。田沢川は鉄砲水により一面河原と化し、11名の犠牲者を出しました。

⑩ 三六災害 川路



土砂を含んだ洪水が、下流の天龍峡でせき上げられて氾らんし、広い範囲が水に浸かりました。川路駅前では、地上から3~4mの高さまで水位が上昇し、以前からたびたび浸水していた旧川路小学校も、2階まで水に浸かりました。





①日曾利

- ・ 天竜川沿いの低い場所にあった田畑が冠水したほか、南ヶ沢など集落へ流れ込む沢沿いで大きな被害が発生した。
- ・ 架かっていた橋は流され、谷底の家屋をひと呑みにし、15戸が流失・全壊した。床上浸水も253戸と集落の大半が被害を受け、1名の命が奪われた。



①下峠

- ・ 生田地域は風化し崩れやすい花崗岩（マサ土）でできており、谷間は流れ出した土で埋まってしまったため、集落は尾根筋に集まっている。斜面や谷底に作られた水田は土砂で埋まったり土石流で流された。

②広町

- ・ 生田地区の中心地。谷間であったため大量の土砂が流れ下り、農協の建物や多くの家屋が破壊された。

③長峰

- ・ 地すべりで斜面が崩れ、家屋ごと流された。



①四徳中心部



②四徳鉱泉周辺



①四徳中心部

- ・ 7名の命が奪われ、84戸あった住宅のうち61戸が被災したため、集団移住をすることになり、700年ともいわれる村の歴史は幕を閉じることとなった。
- ・ 明治8年から続いた分校も100年の歴史を閉じた。

②四徳鉱泉周辺

- ・ 降り続く雨は小さな沢の水位を10m以上押しあげ、いたるところで土石流を発生させた。土石流は5mもの岩を押し流すほどであった。
- ・ 人々は尾根をはうようにして逃げ、懐中電灯で自分の居場所を必死に知らせ合った。

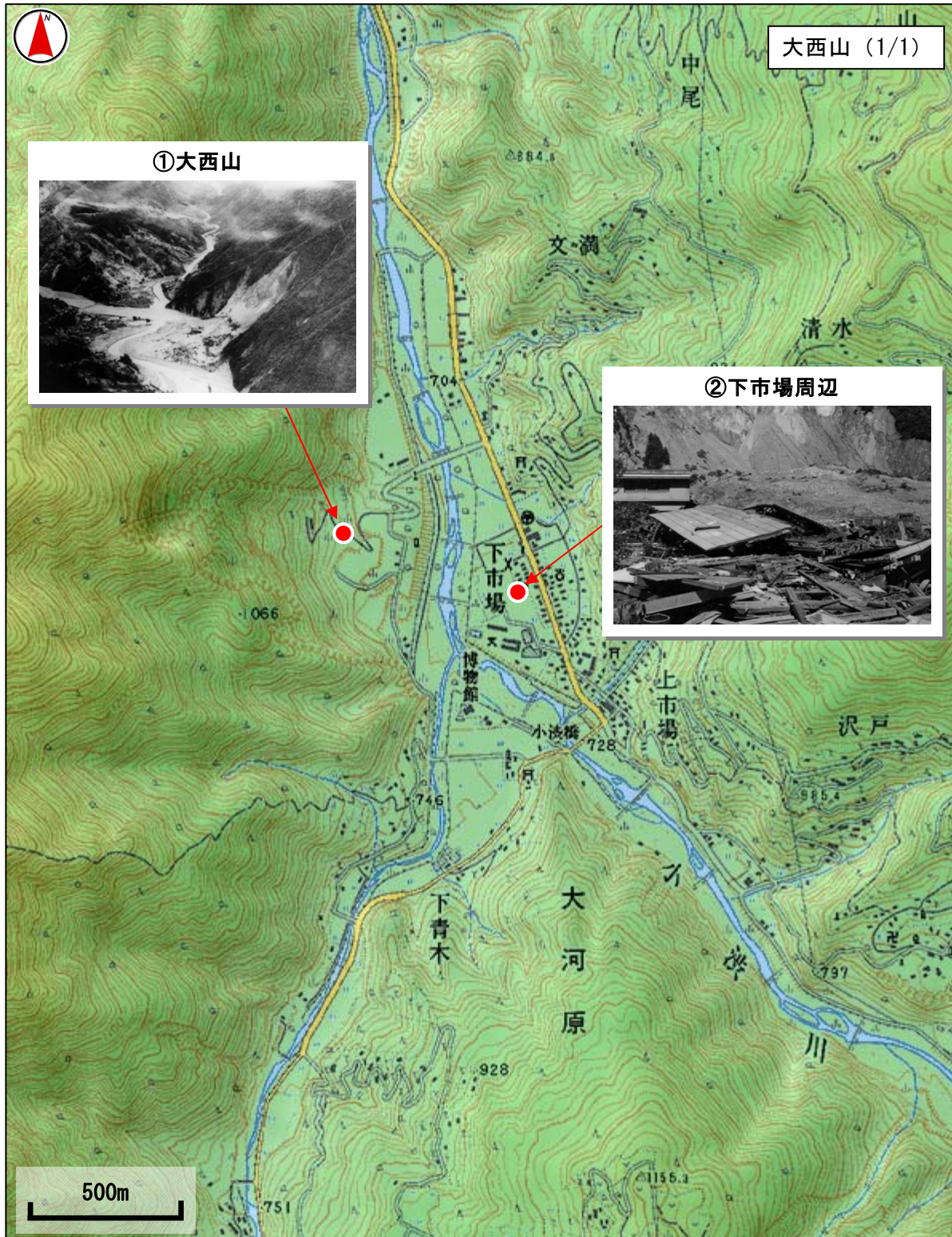


①北川分校周辺

- ・ 鹿塩川沿いにあった北川分校は、6月27日の土石流によって破壊された。
- ・ 大花沢からの土石流で本流の河床が上昇し、39戸あった川沿いの家屋は土砂に埋まった。

②西山の地すべり崩壊

- ・ 発生した地すべりは、鹿塩川を一時的にせき止め、架かっていた橋は流された。

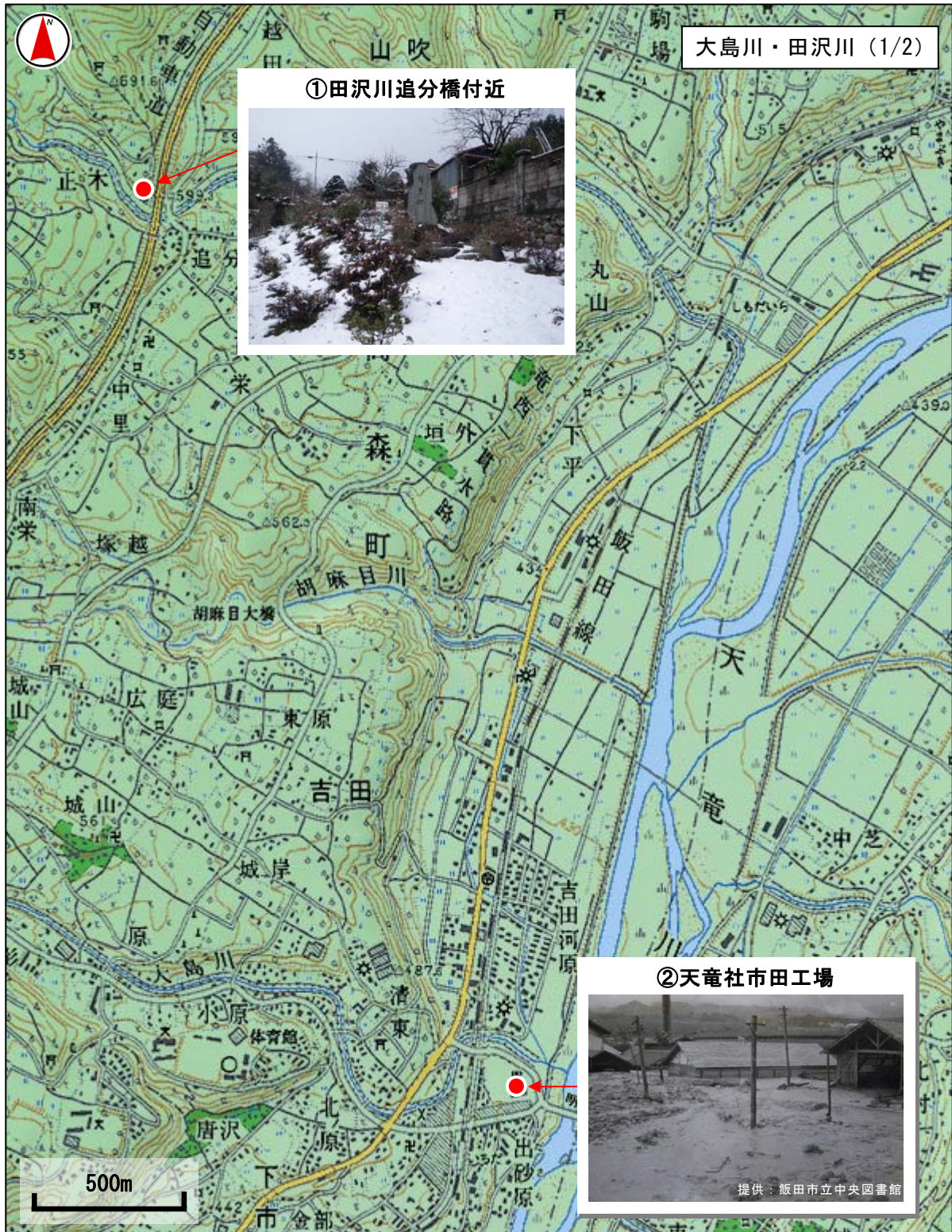


①大西山

- ・ 昭和 36 年 6 月 29 日朝 9 時過ぎ、降り続いた豪雨により大鹿村大西山の斜面が大崩落した。
- ・ 崩落の規模は高さ約 450m、幅約 500m にわたり、その土砂量は約 320 万 m³（東京ドーム 2.5 杯分）であった。

②下市場周辺

- ・ 大西山の崩落によって崩れ落ちた土砂は、一気にふもとの下市場、文満などの集落を呑み込み、39 戸の家屋が破壊され、42 名の命が一瞬で奪われた。
- ・ 大鹿小学校は崩壊の影響を直接受け、体育館の壁が吹き飛ばされ、小渋川の濁流により 1 階の教室は泥沼と化した。



大島川・田沢川 (1/2)

①田沢川追分橋付近



②天竜社市田工場



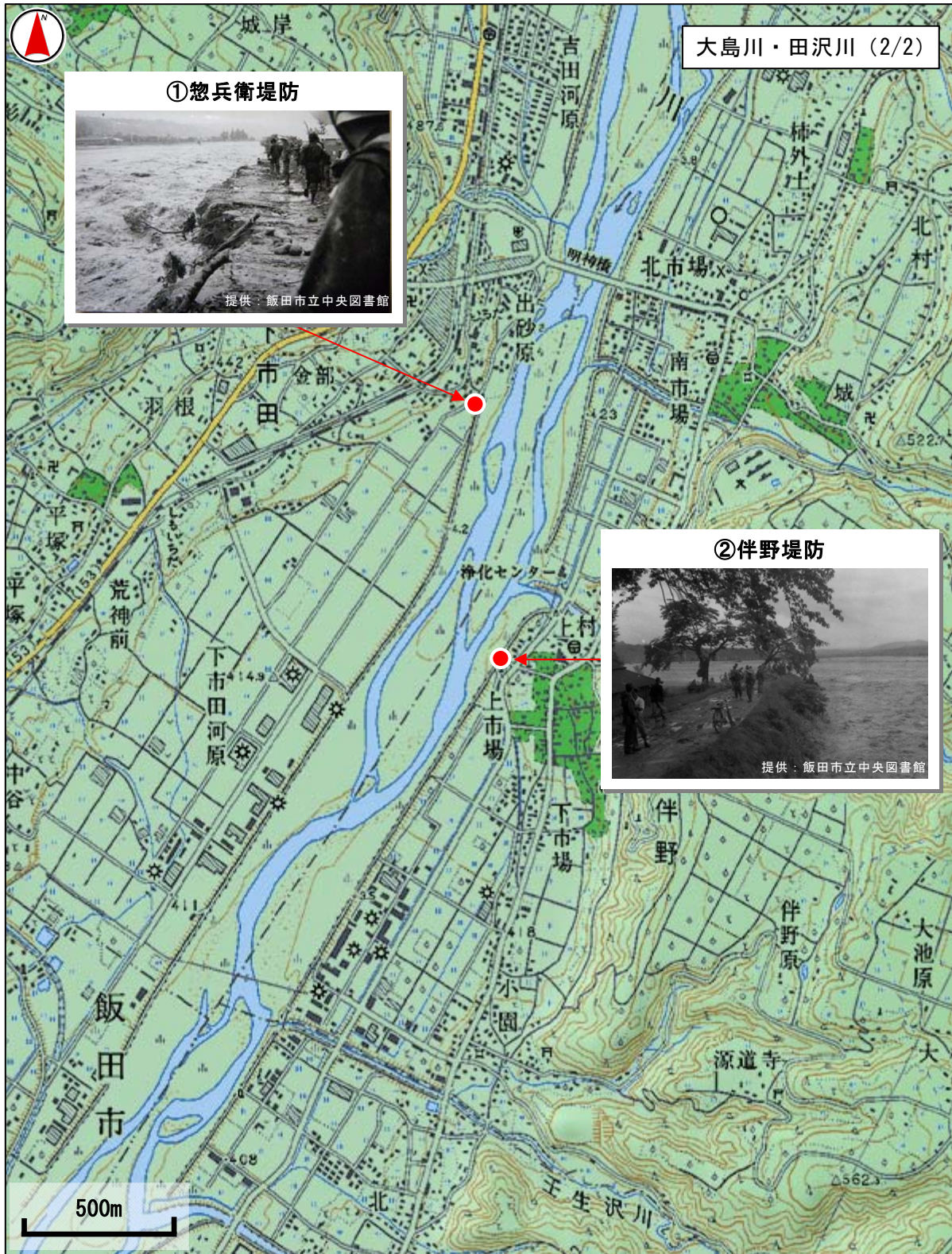
提供：飯田市立中央図書館

①田沢川追分橋付近

- ・ 追分橋より下流側の水田を守るため、12人が水防作業を行っていたが、土石流に全員がのみこまれた。11人は亡くなったが、奇跡的に1人のみ助かっている。
- ・ この時亡くなった方々の慰霊碑が建立されている。

②天竜社市田工場

- ・ 大島川の氾らんにより土砂が流入して、建物・機械の全てが埋没した。
- ・ 被害額は約1億円に達したが、組合員の奉仕や国庫補助を得て復旧し、昭和36年12月から生産が再開された。



①惣兵衛堤防

- ・ 巨岩を積み上げた長さ約 500m にわたる惣兵衛堤防は、200 年以上もこの地域を守ってきたが、盛り上がった天竜川は堤防を乗り越え、地上部のほとんどが押し流された。現在は土台の石のみが残っている。

②伴野堤防

- ・ 約 570m にわたって破堤した。三六災害当時は上流に小渋ダムもなかったため、天竜川に大量の土砂が堆積した。この堆積によって、堤内地と堤外地が同程度の河床の高さになり、オーバーフローするように堤防が決壊した。



野底川・飯田松川 (1/1)

①金山製糸工場



②夜泣き石

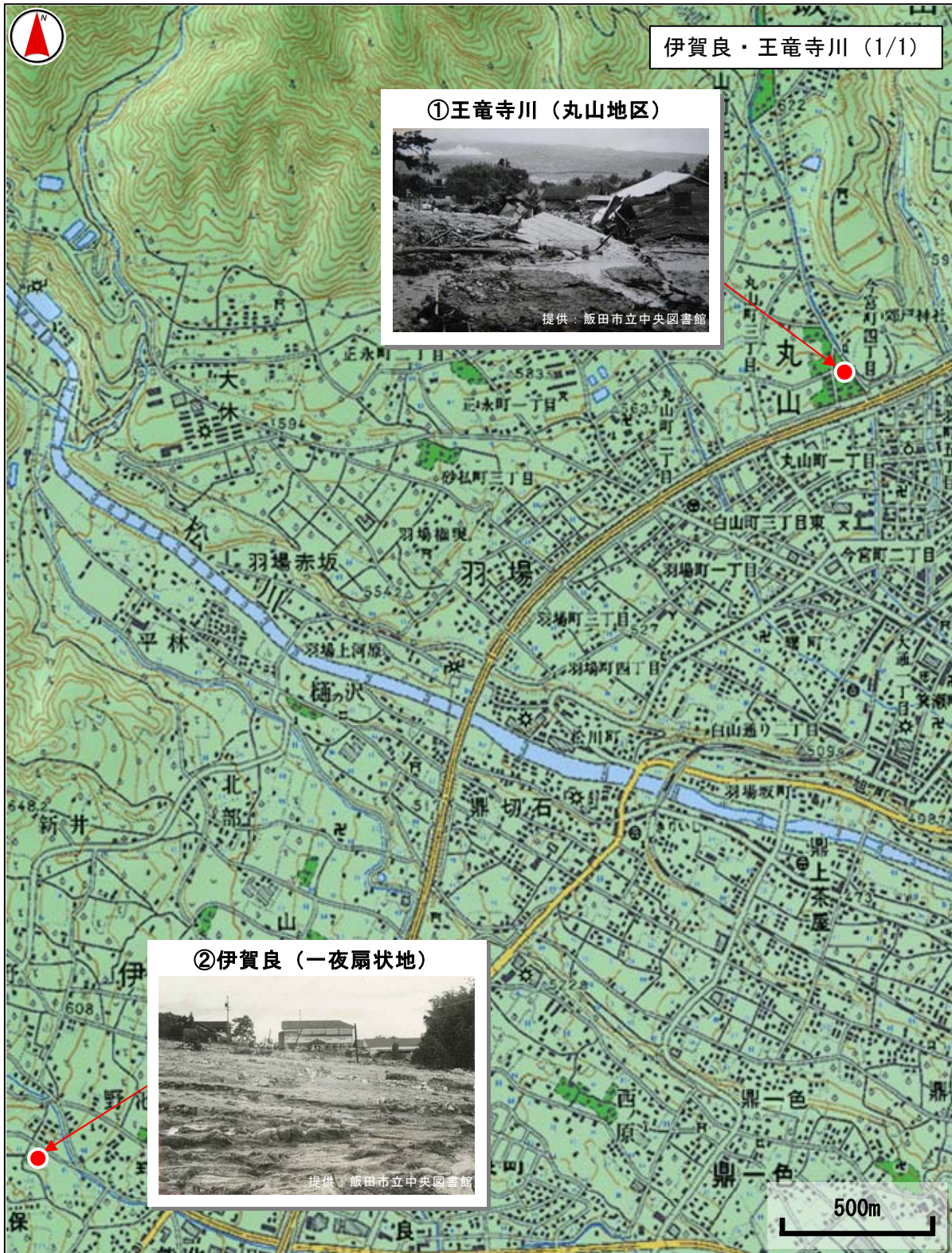


①金山製糸工場

- ・ 橋近くにあった製綿工場の7名が亡くなった。最新の機械を守るためとして若い人たちが中心となって夜も守っていたが、夜中に土石流が起き、工場もろとも流された。
- ・ 現在は、工場より少し上流側に7つの地蔵が建立され祀られている。

②夜泣き石

- ・ 江戸時代に発生した未満水の時に流れてきた、長さ7mにもなる花崗岩。
- ・ 三六災害時は、夜泣き石あたりは高い場所だったため、そこにあった農家の蚕室が近隣住民の避難場所となった。

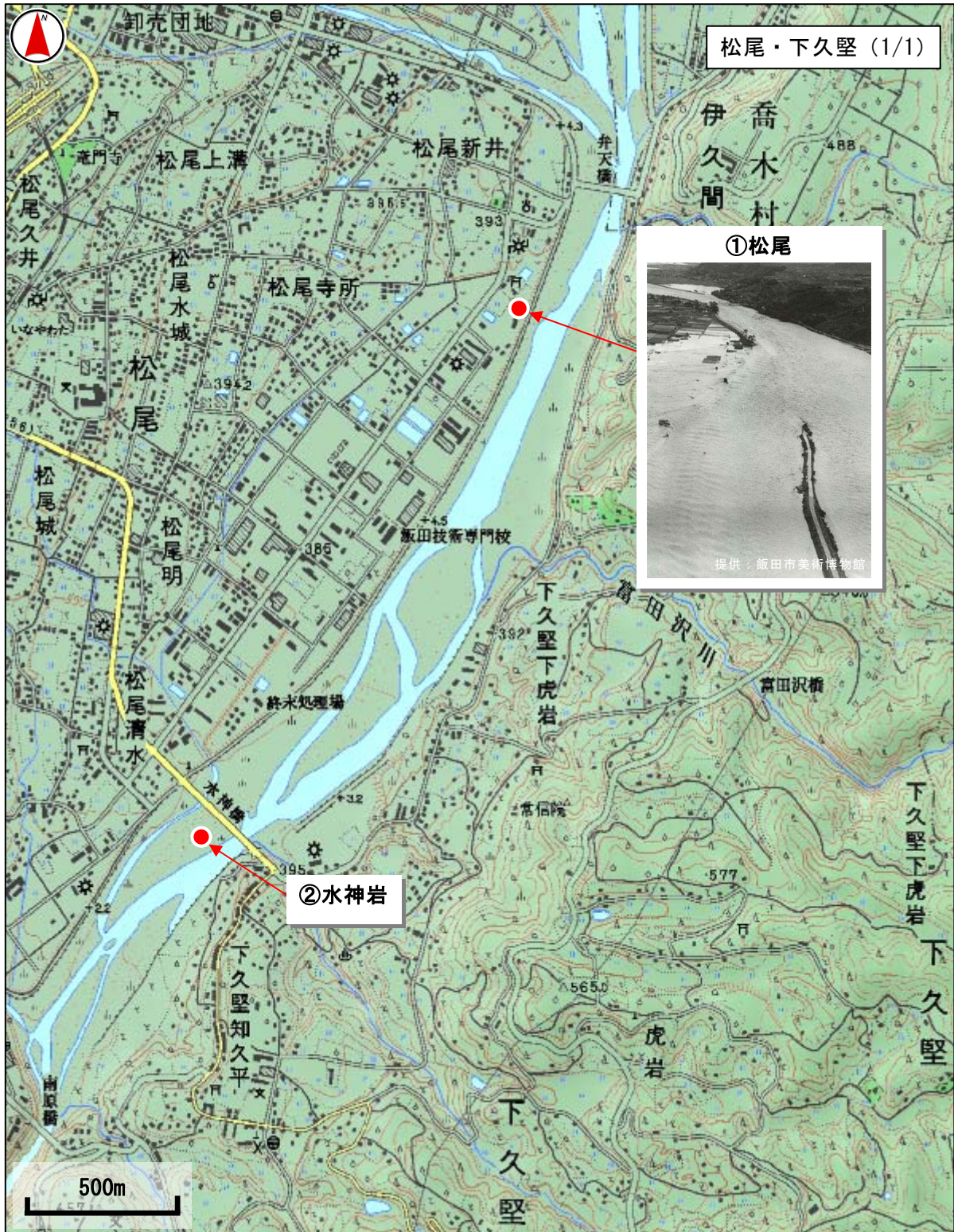


①王竜寺川 (丸山地区)

- ・ 丸山地区周辺は地形変換点になっており、この地形変換点の先端部で土石流が激しく押し出した。
- ・ ちょうど先端部にあった松島産業は土石流の直撃を受け、2名が亡くなった。

②伊賀良 (一夜扇状地)

- ・ 小さなげ崩れが重なって大きな土石流となり、一夜にして新しい扇状地ができた。
- ・ 土石流により5名の命が奪われ、45戸の家屋が押し流された。

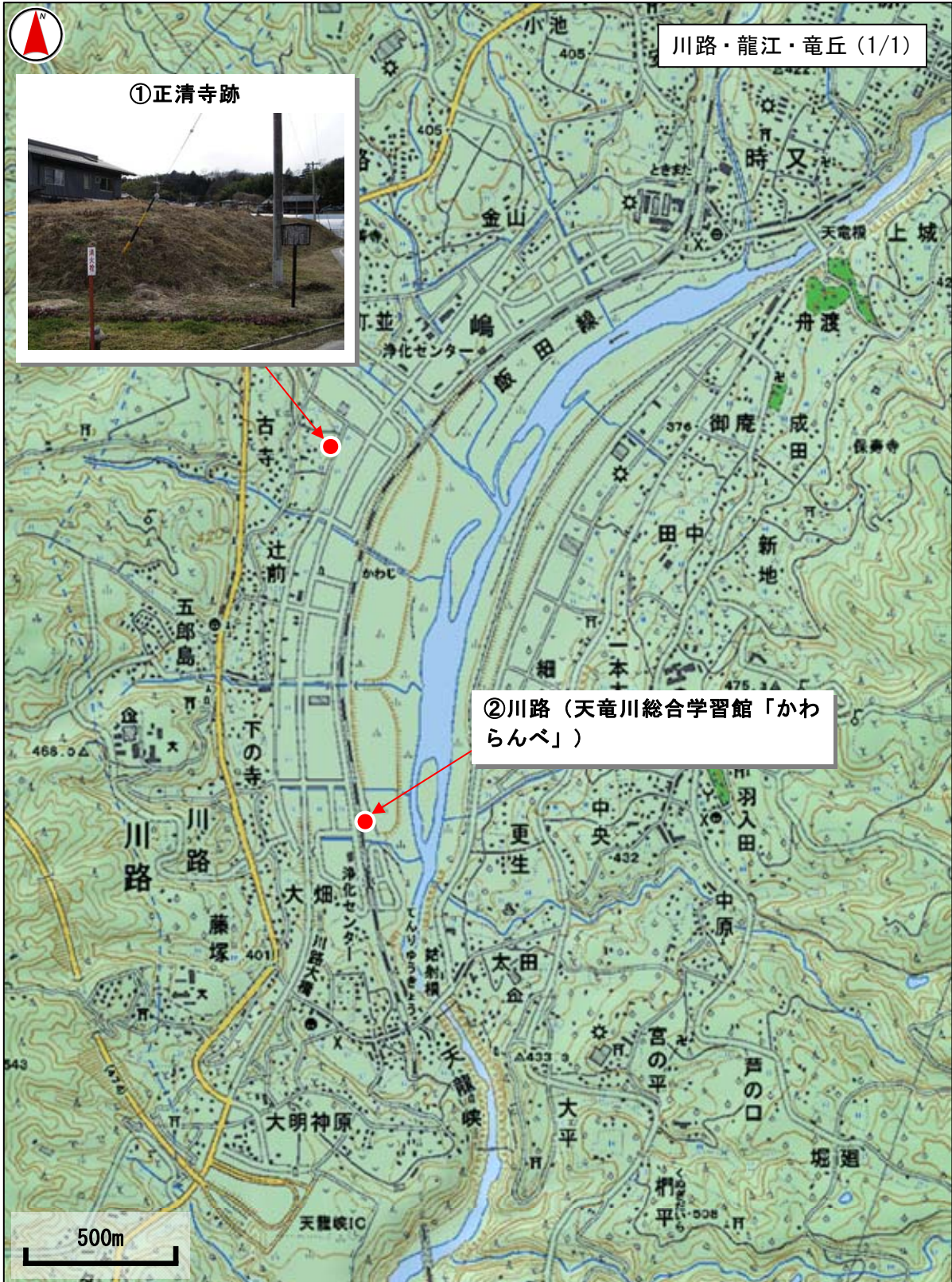


①松尾

- ・ 川の幅が狭い弁天と鷺流峡に挟まれ、氾濫しやすい場所で、三六災害時も、下流の鷺流峡で天竜川がせき上げられた。
- ・ 天竜川は水かさを増し、弁天神社南側の堤防が決壊した。濁流は主に松尾方面へ流れ込み、広い範囲で家屋や田畑が流失した。

②水神岩

- ・ かつてはここに兩岸から吊り橋が架けられ、水神橋が架かっていた。
- ・ 三六災害の時は、立木で埋まった。



①正清寺跡

- ・ 三六災害によって寺院も変貌し、本尊や石仏等は開善寺に移された。
- ・ 長野県で最南端にある前方後円墳でもある。

②川路 (天竜川総合学習館「かわらんべ」)

- ・ 建物の屋上からは、三六災害で被害が大きかった川路・龍江・竜丘地区を一望することができる。
- ・ 三六災害最高水位標が設置されている。

山ごと崩れた大西山

— 崩れ落ちる土砂と風圧が集落を呑み込んだ！ —



昭和 36 年 6 月 29 日朝 9 時過ぎ、降り続いた豪雨により大鹿村大西山の斜面が大崩落しました。崩落の規模は高さ約 450m、幅約 500m にわたり、その土砂量は約 320 万 m³（東京ドーム 2.5 杯分）でした。

一気に崩れ落ちた土砂は、ふもとの下市場、文満などの集落を呑み込み、39 戸の家屋が破壊され、42 名の命を一瞬のうちに奪いました。



当時

大西山



崩落時の風圧で壊れた大鹿小学校体育館



大西山崩壊地の対岸へ押し流された家屋



現在（平成 23 年）

大鹿村落合地区より大西山崩壊地を望む



当時

小洪橋周辺で復旧活動する人々



現在（平成 23 年）

三六災害体験談

大西山に近い下市場に自宅があった、前沢ためよさん（85）のお話

災害当時は 36 才。崩落により家を失った。雨がやんでちょっと晴れた時に外が騒がしく、障子を開けてみたら山がかぶさってくると云うか落ちてきた。あっという間に早くて、皆逃げられなかった。逃げ出したとたんに水が家の中にも入ってきた。まごまごしていたら家と一緒にながされていた。家はマッチ箱をなぎ倒すようにとんじやった。前の晩にリュックサックに何かしら用意しておいたが持ち出す暇もなく、それでも良く靴を履いて出たと思って、道路の向こうの家が自分の家まで飛んできてそれでどさんと落ちた。訳が分からず何が起こったかという感じでした。

願いは、家や物が無くなったけれど何より命を大事にしたい。命さえあれば後はなんとかできると思った。

集落の歴史を閉ざされた四徳

ー 土石流が集落ごと呑み込む！ 集団移住へー



降り続く雨は小さな沢の水位を 10m以上押し上げ、いたるところで土石流を発生させました。土石流は 5mもの岩を押し流すほどでした。人々は尾根をはうようにして逃げ、懐中電灯で自分の居場所を必死に知らせ合いました。しかし、7名の命が奪われ、84戸あった住宅のうち 61戸が被災したため、集団移住をすることになり、約 750年に及ぶ四徳地区の歴史に終止符が打たれました。



当時



現在（平成 23 年）

土砂で埋まった
四徳分校



土石流により押し流されたバス



当時



破壊され傾いた農協支所



現在（平成 23 年）

土石流が流れ下った四徳
鉱泉周辺の惨状

三六災害体験談

当時中川村の四徳に住んでいた、小松昇さん（70）のお話

災害当時は 20 歳。今でも忘れられないのは、何軒も家が流されていく光景だ。蔵も、畜舎やウシも流されていった。すぐ目の前で起っている出来事だったが、とてもとても助けることはできなかった。

災害発生後の全戸移住は例がなかったが、予算的に復旧できる見通しも立てられなかった。皆サラリーマンとしての経験がなかったので、移住して会社勤めがうまくできるのか、生活面でも四徳から出てうまくやっつけられるのか、とても不安を抱えていた。

今になって年に数回四徳に来てみると、小さいころこのあたりの山を飛び回って遊んだことを思い出し、忘れられない。災害については、いまだに本当に恐ろしい体験をしたと思う。

泥の海と化した川路

— 濁った水が屋根まで！ 駅や小学校も水没した —

飯田市の川路地区は、天竜川や久米川からの土砂を含んだ濁流で水没し、江戸時代の大洪水である「未満水」さながらの状態となりました。濁水は住宅の2階まで達し、全半壊、床上・床下浸水などが相次ぎました。川路駅も屋根まで水没し、川路小学校は2階の窓まで水に浸かりました。当時、日本三大桑園といわれた広大な桑畑も消失しました。



川路上空より天竜峡方向を望む



濁流がすぐそばまで達した天龍橋



2階の窓まで水に浸かった川路小学校



現在（平成23年）



土砂で埋め尽くされた川路駅前付近

三六災害体験談

飯田市の川路に住んでいた、吉川武夫さん（69）のお話

災害当時は19歳。飯田市内に勤めていて、苦勞してなんとか駅前近くの自宅にたどり着くと、水が線路を越えてくるところだった。水の勢いがすごく荷物を二階に上げた。辺りが暗くなったころ停電になり、二階にまで水が上がってきた。逃げるに逃げられず、消防団のイカダで助けられた。

川路は水害が多くて慣れていたが、その「慣れ」が恐ろしいと感じた。翌日になって避難した先から自宅近くに戻ると、泥沼の状態で手がつかず、誰も動く気力がなくなった。

「災害は忘れたころにやってくる」というが、それが現実となる時代になってきたと感じる。水害が起きることを前提に、日頃から防災に対する心構えを養っておかなければと感じる。